

【ねがいましては】

令和5年2月25日

KYOWA SCHOOL

第390号

「親の使命」

一僕は子供のころから、ずっとお父さんとお母さんの言うとおりにしてきました。そうすることでふたりが喜んでくれるのが嬉しかった。でも、だんだん、ふたりが望む人間になれないと気づきはじめたんです。それを認めたくなくて、最初は自分の心をごまかしていました。自分さえ我慢すれば、お父さんもお母さんも喜ぶし、僕自身にとってもそのほうがきつといいんだ、とっていました。でもー

【ねがいましては】前号で取り上げました新聞連載「風に立つ」R5.2.25版のものです。ここで終わります。

この場面、家庭裁判所で中間審判が行われた際のもので、当該少年の両脇にご両親が座り、裁判官からの質問を受けている時の少年の証言です。裁判官からは次のような質問が少年へ出されました。「春斗君(当該少年)は、清嘉(少年が補導委託でお世話になった第三者宅の名)での暮らしはどうでしたか。楽しかった、辛かった、なんでもいいです。正直に話してください」との問いかけからのものです。

さて、少年はこの「でも」のあと、何を語ったか……。私自身、この夕刊を読んだ直後に打っていますので、知る由もありません。これをお読みになっているお父さん、お母さんならどう想像されますか。

まず初めに私が申し上げたいのは、このようにご両親に喜んでもらいたいがためだけに日々苦しんでいるお子さんは多くいるということです。いままで出会ってきた数多くの子どもたちの中に、入試や定期テストが近づいてくると、目が点になり、手が止まってしまう子を数多く見てきました。目の前には取り組まねばならない具体物があるにもかかわらず、目は静止のまま、思考は遮断され、その子の脳裏に浮かぶこと「どうしよう……」その一点です。

叱られる……。悲しませる……。この思いはご両親を意識することから生まれるもの。自身の大切な人に対する気持ちです。ただ時間が過ぎていくだけ……。

そこで先ほどの少年、春斗君はいよいよ勇気を振り絞り結論を出す瞬間がきました。「偉い！」のひとことです。

次回が楽しみでなりません。

「ずっとお父さんお母さんの言うとおりにしてきました。」この言葉の裏にあるもの、お父さんお母さんから褒められたい……。言うとおりにするだけならロボットです。それでご両親はしあわせを感じることができる。とても殺風景な状態です。子のこころの存在はそこにはありません。子は感情を表すという機能を失ったいわば病気の状態です。「ひと」と「ひと」、感情をぶつけあって初めて「ひと」と理解できるはず。またそれが家族だといえると思います。感情の交換、つまり「話し合う」という行為を繰り返すうちにやがてお互いを理解し、あなたはあなた、自分は自分、という「個」の理解が進み、他を思いやる気持ちが芽生えてきます。親の使命→子の旅立ちへの援助です。子が独り立ちするための礎を育てあげることです。それには子が自らの意思を勇気を振り絞りながら表現したとき、たとえそれが親の意にそぐわなかったとしても、子が自分の意思を真正面からぶつけてきた行為に「よくやった」と、ほめたたえるべきだと思います。我が子がこんなにもこころを成長させたことに感激すべきだと思います。生きようとする力を全身にみなぎらせた瞬間を祝福してあげてください。

「ひと」がまったく「ひと」らしく見えない瞬間があります。それが「無関心」の状態です。まったく生きようとする意志が見られません。ただ座っているだけ。周りが右へ行くなら自分も右。左へ行くなら自分も左。言われたことを言われたようにすればいい。毎日がその繰り返し。べつにわからないところがあっても叱られるわけではないし、当たらず触らず、今日も無事、自分に危害が及ばねばそれでいい。そんな毎日を送ってられる場所があります。義務的に9年間、今ではその後も延長3年間、あわせて12年間、無関心状態でも無事に生活できる場所があります。

この新聞の連載は、あくまでも小説です。しかしここに登場する少年は今の形骸化された教育制度が作り出した典型的な少年からの脱出物語のような気がしております。社会がおしつける成績至上主義、勝利至上主義が作りあげた子どもたちが、そうじゃないんだ、このままじゃいけないんだと、立ち上がっていく物語のような気がいたします。

「しあわせ」とは……。この答えがはっきりしない現社会において、日々どう生きていこうかと、不安を抱え生活している少年たちへのエールになるような展開をこころより期待しています。

勉強が命、部活が命と、何やら唄の中のできごとのみに一喜一憂している人生からの脱出です。時に唄の中にも唄から飛び出すことができる瞬間を体験することができます。それが「学びを楽しむ」ということです。勉強を「点数・成績・順位」として受け取らず、「へー、そうなんだ。」「なに、それで次はどうなるの」などのように、わくわく感を楽しむことへと切り替えます。社会科であれば日本中を、世界中を飛びまわられます。そして週末には実際に教科書に載っていた場所へ家族みんなで出かけてみてはいかがでしょうか。例えば群馬県の富岡製糸工場だったり、富士山だったり、川越だったり……。そこには歴史もあるし、人々の暮らし(文化)もあります。周りに広がる景色を数百年、いや数千年前から同じように眺めてきた私たちの大先輩たち……。そのころの方々がどのような暮らしをされていたのか、目を閉じそっと想いを馳せてください。そんなことができる家族って……。「しあわせ家族」の誕生です。